

# 『扶桑集』の詩人(三)

後藤昭雄

## はじめに

本稿は一条朝に成立した詩集『扶桑集』の詩人たちについての整理作業である。『二中歴』巻十二、「詩人歴」記載の「扶桑集七十六人」について、経歴、文事に関する事績、著作・作品等について検討、記述する。『扶桑集』の詩人(一)、「成城国文学」第三五号、二〇一九年、「同(二)」(『成城国文学』第三六号、二〇二〇年)に続いて、菅原文時、三統理平、都良香、高丘五常、嶋田忠臣、紀在昌、慶滋保胤、橘正通、源相規、菅原雅規、藤原篤茂、源順を取り上げる。

15<sup>1</sup> 菅原文時 昌泰二年(八九九)～天元四年(九八一)

原文は「菅三品」(「三品」は没時に従三位であったことによる)。道真の孫、高槻(後出71)の子。雅規(同24)、庶幾(同32)は兄弟。昌泰四年、三歳にして祖父、父の左遷に遭う。延長の初め(元年は九二三年)内御書所に候する。時に学生か。承平三年(九三三)文章生となり、同五年、学問料を支給される。天慶五年(九四二)に对策に及第、官途に就き、長らく内記、弁官を勤め、天曆十年(九五六)文章博士となる。応和二年(九六二)四位に叙せられ、貞元二年(九七七)式部大輔となる。晩年の天延二年(九七四)、重ねて天元三年(九八〇)、従三位を望む奏状を奉呈し、同四年に至ってようやく従三位に叙せられるが、その年九月八日没した。時に八十三歳。大江朝綱と並んで村上朝を代表する文人である。

真壁俊信「菅原文時伝」（『天神信仰史の研究』続群書類従完成会、一九九四年）がある。

文事事績

延長元年（九二三）三月七日、大学寮北堂での『漢書』意宴

に詩を賦す。（『日本紀略』『扶桑集』巻九）<sup>2)</sup> 存

天慶四年（九四二）三月二十七日、『文選』竟宴に「遠念」賢

士風」の題で詩を賦し詩序を作る。（『日本紀略』『本朝

文粹』<sup>3)</sup>『類聚句題抄』<sup>4)</sup> 91） 存

天慶六年（九四三）一月二十四日、内宴に「花間訪」春色」

の題で詩を賦す。（『日本紀略』『類聚句題抄』149） 存

天慶六年三月、成明親王（のち村上天皇）邸の詩宴に「香乱

花難」識」の題で詩を賦す。（『本朝文粹』297）

拙稿「『属文の王卿—醍醐系皇親—」（『平安朝漢文学論

考）参照。

天慶六年五月二十七日、二条前后藤原高子の本位を復す詔を作

る。（『本朝文粹』48） 存

天慶六年、東寺長者貞崇の少僧都の辞表を作る。（『扶桑略

記』同年条） 存

天慶八年（九四五）一二月七日、大赦の詔を作る。（『本朝世

紀）

天曆元年（九四七）閏七月二十九日、藤原師輔の封戸を減じる

ことを請う表を作る。（『本朝文粹』135） 存

天曆二年（九四八）二月二十七日、藤原忠平の関白を辞す表に

答える勅を作る。（『本朝文粹』52） 存

天曆三年（九四九）二月一五日、橘直幹ら七人と共に大藏の

一本の御書を「実録」する。（『別聚符宣抄』）

天曆三年三月一七日、藤原忠平の致仕の表に答える勅を作る。

（『本朝文粹』53） 存

天曆五年（九五二）一〇月五日、残菊宴に「叢香近」菊籬」

の題で詩を賦す。（『九曆』『類聚句題抄』424） 存

天曆五年二月〜同七年九月、「坤元録屏風詩」の制作に参与

する。

拙稿「坤元録屏風詩をめぐって」（『平安朝漢文学史論

考）参照。

天曆七年（九五三）七月、藤原師輔の吳越公に贈る書状を作

る。（『本朝文粹』185） 存

天曆七年一〇月五日、残菊宴に「花寒菊点」叢」の題で詩を

賦す。（『九曆』『和漢朗詠集』<sup>5)</sup> 271） 存

天曆九年（九五五）九月一七日、藤原実頼の左近衛大将を辞

す表を作る。(『本朝文粹』140) [存]

天曆九年二月二十五日、正月の節会等の行事の変更についての

の論奏を作る。(『本朝文粹』96) [存]

天曆九年十二月、式明親王亡室四十九日願文を作る。(『言泉集』) [存]

拙稿「『言泉集』所引の平安中期願文資料」(『成城文藝』

第二五二・二五三合併号、二〇二〇年) 参照。<sup>6</sup>

天曆一〇年(九五六)七月二三日、服御常膳を減じ恩赦を行う詔を作る。(『本朝文粹』47) [存]

天曆一〇年八月一九日、諸公卿の禄を減じること請う表に答える勅を作る。(『本朝文粹』57) [存]

天曆一〇年十一月二一日、子息惟熙の学問料を申す奏状を作る。(『本朝文粹』172) [存]

天曆一一年(九五七)五月一日、延暦寺講堂供養文を作る。

(『本朝文粹』卷三七) [存]

天曆一一年七月二三日、藤原師輔亡室康子内親王四十九日願文を作る。(『願文集』七(大日本史料一—一〇、天徳元年

六月六日条)) [存]

天曆一一年一〇月五日、残菊宴に「寒軽菊吐」滋」の題を献じる。(『九曆』)

天曆一一年一〇月二七日、天徳と改元。この年号を勘申する。

(『一代要記』)

天徳元年(九五七)二月二七日、意見封事三箇条を献じる。

(『本朝文粹』68) [存]

天徳二年(九五八)一月二一日、小野道風の山城守を申す奏

状を作る。(『本朝文粹』151) [存]

天徳二年五月一〇日、仁王会に呪願文を作る。(『日本紀略』)

天徳二年、藤原顕忠亡室四十九日願文を作る。(『言泉集』)

[存]

天徳三年(九五九)八月一六日、内裏詩合に作者(四人)の一人として詩を賦す。(『天徳三年八月十六日關詩行事略

記』) [存]

天徳四年(九六〇)三月一九日、為平親王読書始めに『御注

孝経』を講授する。(『日本紀略』)

天徳四年九月二二日、藤原顕忠の右大臣を辞す表を作る。

(『本朝文粹』124) [存]

天徳四年一〇月一九日、恩詔を作る。(『日本紀略』)

天徳四年二月一六日、仁王会に呪願文を作る。(『日本紀略』)

天徳五年(九六一)二月一六日、応和と改元。この年号を勘

申する。(『改元部類』)

応和元年（九六一）三月五日、村上天皇が冷泉院に催した桜

花宴に「花光水上浮」の題で詩序を作る。（『日本紀略』

『本朝文粹』300）存

応和元年、源重光亡室四十九日願文を作る。（『言泉集』）存

応和四年（九六四）三月、源能正亡室四十九日願文を作る。

（『言泉集』）存

応和四年五月三日、村上天皇皇后藤原安子崩御に伴い、皇后

崩時の例について勘申する。（『日本紀略』）

応和四年五月二十六日、藤原実頼亡室（藤原能子）四十九日願

文を作る。（『言泉集』）存

応和四年七月一〇日、康保と改元。この年号を勘申する。

（『改元部類』）

康保二年（九六五）一〇月二三日、村上天皇が朱雀院柏梁殿

に催した詩宴に「霜葉滿<sub>レ</sub>林紅」の題で詩を賦す。（『日本

紀略』『新撰朗詠集』284）存

康保二年、子息輔昭の学問料を申す奏状を作る。（『本朝文

粹』173）存

康保三年（九六六）二月二一日、内宴に「鳥声韻<sub>二</sub>管絃<sub>一</sub>」

の題で詩序を作る。（『日本紀略』『本朝文粹』340）存

康保四年（九六七）七月七日、藤原実頼の先帝（村上天皇）

追善諷誦文を作る。（『本朝文粹』428）存

康保四年一〇月二五日、左大臣藤原実頼の致仕を請う表を作

る。（『本朝文粹』133）存

康保四年一二月二五日、太政大臣藤原実頼の職を辞す第二表

を作る。（『本朝文粹』112）存

康保五年（九六八）、三善道統亡室四十九日願文を作る。

（『言泉集』）存

安和元年（九六八）一月五日、藤原師尹の右大臣を辞す第三

表を作る。（『本朝文粹』125）存

安和二年（九六九）一月八日、太政大臣藤原実頼の致仕を請

う表を作る。（『本朝文粹』132）存

安和二年三月一三日、藤原在衡、栗田山莊に尚齒会を行う。

七叟（七人の老人）の一人として参加し、詩序を作る。

（『本朝文粹』246）存

天禄二年（九七一）三月二八日、文章生試に題「踐<sub>レ</sub>露知<sub>レ</sub>

暑<sub>（ツル）</sub>」を出題する。（『日本紀略』）

天禄二年四月二九日、藤原伊尹の亡父母報恩願文を作る。

（『本朝文粹』422）存

天禄二年、橘仲遠亡室願文を作る。（『言泉集』）存

天延二年（九七四）三月一〇日、藤原兼通の太政大臣を辞す

表を作る。(『本朝文粹』113) 〔存〕

天延二年三月一日、清涼殿に花宴。題「花前楽」を献じる。

(『日本紀略』)

天延二年閏一〇月三日、藤原義孝の四十九日願文を作る。

(『親信卿記』〔大日本史料一—一五、同九月二六日条〕)

天延二年一月一日、朔旦冬至の賀表を作る。(『政事要略』

卷二五) 〔存〕

天延二年一月一日、従三位を申す奏状を作る。(『本朝文

粹』152) 〔存〕

天延二年あるいは三年秋、永平親王の読書始めに侍し、詩宴

の序を作る。(『本朝文粹』256) 〔存〕

拙著『本朝文粹抄』六、第五章「第八皇子の始めて御注考

経を読むを聴く詩の序」参照。

貞元二年(九七七)六月一日、源雅信の右大臣を辞す第三

表を作る。(『本朝文粹』126) 〔存〕

貞元二年八月一日、藤原頼忠の催す前栽歌合に和歌真名序

を作る。(『本朝文粹』347) 〔存〕

貞元二年秋、「老閑行」を作る。(『本朝文粹』354) 〔存〕

天元二年(九七九)三月、盛明親王邸の詩宴に「渡水落花

来」の題で詩を賦す。(『本朝文粹』307)

拙稿「属文の王卿—醍醐系皇親—」(『平安朝漢文学論

考』) 参照。

天元二年五月二六日、大江匡衡に課す策問「寿考」を作る。

(『本朝文粹』81) 〔存〕

天元三年(九八〇)一月五日、従三位を申す奏状を作る。

(『本朝文粹』153) 〔存〕

著作・作品

詩文集『文芥集』は卷七の一部(願文七首)が『言泉集』に抄出されて残る。

拙稿『言泉集』所引の平安中期願文資料(『成城文藝』

二五二・二五三合併号、二〇二〇年) 参照。

『菅三品序』(『通憲入道藏書目録』)、『叙位略例』(菅原文時

『申』従三位一状)、『本朝文粹』152) は散佚。

『扶桑集』に詩三首、詩序一首がある。

『本朝文粹』に三八首、『和漢朗詠集』に四三首が入集する。<sup>(8)</sup>

他に詩が「天徳三年八月十六日闘詩行事略記」『類聚句題

抄』『新撰朗詠集』『作文大体』『江談抄』『擲金抄』『続撰和

漢朗詠集』『四季物語』に、文章が『本朝世紀』『扶桑略記』

『政事要略』『願文集』(『大日本史料』一—10、天徳元年六月

六日条、『言泉集』に残る。

16 三統理平 仁寿三年（八五三）～延長四年（九二六）

原文は「統理平」。大学寮に学び、寛平三年（八九一）方略試の宣旨を得る。問者は藤原春海。翌四年に对策を受けるが不第となる（のち昌泰二年に改判の愁状を提出する）。少内記を経て、寛平八年、少外記、昌泰元年（八九八）に大外記となる。延喜元年（九〇一）従五位下に叙せられ、越前介に任じられる。のち大内記となる。なお『二中歴』儒職歴に文章博士、式部大輔となったと記すが、確かな史料で確認することができない。延長四年四月、没する。七十四歳。

#### 文事事績

寛平六年（八九四）九月九日、重陽宴に「天淨識寶鴻」

の題で詩を賦す。（『日本紀略』『類聚句題抄』34）存

延喜元年（九〇一）九月、藤原時平が催した大藏善行七十賀

の祝宴で詩を賦す。（『日本紀略』『雜言奉和』）存

延喜六年（九〇六）二月一七日、日本紀竟宴に序を作る。

（『日本紀竟宴和歌』）存

延喜八年（九〇八）八月一四日、問頭博士として菅原淳茂に

「鳥獸言語」の策問を課す。時に従五位下大内記。（『本朝文粹』75）存

延喜十一年（九一〇）九月九日、重陽宴に「霽色明遠空」

の題で詩を賦す。（『日本紀略』『類聚句題抄』30）存

延喜十四年（九一四）九月九日、重陽の詩宴に講師を勤める。

（『貞信公記』）

延喜十六年（九一六）九月九日、重陽宴に「寒雁識秋天」

の題で詩を賦す。（『日本紀略』『類聚句題抄』24）存

延喜十七年（九一七）三月六日、観桜の詩宴に「春夜翫桜花」

の題で詩・詩序を作る。（『醍醐天皇御記』）

延喜十八年（九一八）九月九日、重陽宴に「草木凝秋色」

の題で詩を賦す。（『日本紀略』『類聚句題抄』31）存

#### 著作・作品

菅原文時が書写した『統理平集』があったが（『江談抄』五

―46）散佚した。

『三代実録』『延喜格』『延喜式』の編纂に参与する。

『本朝文粹』に一首、『和漢朗詠集』に一首が入集する。

他に詩が『雜言奉和』『類聚句題抄』に、文章が『日本紀竟

宴和歌』に残る。

## 17 都 良香 承和元年(八三四)～元慶三年(八七九)

従五位下主計頭貞継の子。『文華秀麗集』の編者の一人、都腹赤は伯父に当たる。初めの名は言道。在中(後出34)は子である。仁寿三年(八五三)に大学寮に入学し、字を都賢と

称した。貞観二年(八六〇)文章生となり、同一一年、対策に及第した。問者は春澄善繩で、その策問(「神仙」「漏剋」と良香の対策が残る。翌年、少内記として官途に就く。同一四年、渤海使の来朝に当たり掌客使に任じられ、これに

際して名を良香と改めた。翌年、従五位下に叙せられ、大内記となり、同一七年、文章博士を兼ねる。元慶三年二月二十五日、四十六歳で没した。『扶桑略記』に卒伝がある。また大江匡房の『本朝神仙伝』にも伝がある。

中條(田坂)順子「都良香伝考」(今井源衛教授退官記念『文学論叢』、一九八二年)があり、文事事績についても記述が備わる。ただし、以下の二条を補う。

貞観七年(八六五)八月、神護寺法華願文を作る。(『神護寺資料』)

貞観八年(八六六)三月二三日、清和天皇、藤原良相邸(百花亭)に行幸、花宴が催される。詩序を作る。(『三代実

録』『平安朝佚名詩序集抜粹』)

〔存〕

## 著作・作品

詩文集『都氏文集』がある。本来六卷であったが、四、五、六の三巻が現存する。

『扶桑集』に詩六首、詩序一首がある。

『本朝文粹』に二一首、『和漢朗詠集』に二二一首が入集する。他に詩が『新撰朗詠集』『江談抄』『擲金抄』『和漢兼作集』に、文章が『三代実録』『平安朝佚名詩序集抜粹』に残る。

## 18 高丘五常 承和四年(八三七)～未詳

原文は「高五常」。高丘氏の先祖に当たる沙門詠が天智二年(六六三)百濟より帰化し、子の楽浪河内が神龜二年(七二五)高丘連の氏姓を賜わる。その子比良麻呂は大学に学び、大外記となる。五常はその子孫である。五常は大学に学び、文章得業生となり、元慶三年(八七九)の頃、出雲権掾を兼ねる。この年か翌四年、対策に及び及第。問者は菅原道真であった(策問「舒澆淳」「徵魂魄」が『菅家文章』巻八にある)。同五年、左少史として官途に就き、翌六年、少外記、仁和元年(八八五)大外記となる。同二年、外従五位下に叙せられる。筑後介、紀伊介を経て。寛平九年(八九七)、大学助となる。高丘相如(後出67)は孫である。

文事事績

寛平六年（八九四）九月九日、重陽宴に「天淨識」賓鴻」の題で詩を賦す。（『日本紀略』『類聚句題抄』335）存

作品

『扶桑集』に詩一首がある。

『本朝文粹』に一首が入集する。

他に詩が『類聚句題抄』『新撰朗詠集』に残る。

19 嶋田忠臣 天長五年（八二八）～寛平四年（八九二）

原文は「田達音」、「忠臣」の小字注がある。達音は名の読み

「ただおみ」に近似した音の漢字を当てた中国風の名、翻名

（『二中歴』卷十三）。清田の孫か。父は未詳。大学寮に学び

（字、朝進）菅原是善に師事する。斉衡元年（八五四）頃、

文章生となり、同二年、是善の命で道真（十一歳）の詩作の

指導に当たる。のち娘宣来子は道真の妻となる。貞観元年

（八五九）渤海使の来朝に当たり臨時に加賀権掾に任じられ

接客使となる。またこの頃、藤原基経の近習となる。同八年、

文章生より少外記となる。同十一年、従五位下に叙せられ、

因幡権介となる。同十五年、大宰少式。元慶三年（八七九）

従五位上となる。同五年、再び渤海使来朝に際し、臨時に玄

蕃頭となり、道真らと共に大使らと詩を応酬する。寛平二年（八九〇）典葉頭となる。同四年、伊勢介として没する。

金原 理「嶋田忠臣傳考」（『平安朝漢詩文の研究』九州大学出版会、一九八一年）

藏中スミ「嶋田忠臣年譜覚え書」（小島憲之監修『田氏家集注』卷之上、和泉書院、一九九一年）があり、後者に詩の制作年時について記述がある。

著作・作品

詩集『田氏家集』三卷がある。

『本朝文粹』に一首、『和漢朗詠集』に六首が入集する。

他に詩が『雑言奉和』『類聚句題抄』『新撰朗詠集』『擲金抄』に残る。

20 紀 在昌 生没未詳

中納言長谷雄（前出5）の孫、式部大輔淑信の子。大学に学

び、文章得業生となり、延長六年（九二八）藤原博文を問者

として対策に応じ及第する。承平五年（九三五）の頃、大内

記、天慶元年（九三八）七月、文章博士となり、天曆四年



(九五〇) 東宮(のち冷泉天皇)の学士となる。のち民部大輔を経て、従四位上式部大輔となる。

文事事績

延喜二〇年(九二〇) 五月、鴻臚館に渤海使餞別の詩宴。詩

序を作る。(『本朝文粹』254) 〔存〕

延長元年(九二三) 三月七日、大学寮北堂に漢書竟宴。詩・

詩序を作る。(『日本紀略』『扶桑集』巻九、『本朝文粹』

261) 〔存〕

延長四年(九二六) 七月四日、宇多法皇、源融のために追善

の法会を行う。諷誦文を作る。(『本朝文粹』427) 〔存〕

延長六年(九二八) 一月二日、内宴に「晴添草樹光」

の題で詩を賦す。(『日本紀略』『類聚句題抄』20) 〔存〕

延長七年(九二九) 一月二日、内宴に「停盃看柳色」

の題で詩を賦す。(『日本紀略』『類聚句題抄』193) 〔存〕

承平五年(九三五) 一月二日、成明親王(のち村上天皇)

『孝経』を学び、この日竟宴。詩宴に序を作る。(『日本紀

略』)

天慶七年(九四四) 九月九日、藤原師輔のために亡室盛子周

忌法会の願文を作る。(『願文集』七〔大日本史料一―八、

同日条) 〔存〕

天曆元年(九四七) 閏七月一七日、仁王会祝願文を作る。

(『九曆』)

天曆三年(九四九) 一〇月一六日、『史記』を講じる。(『日

本紀略』)

天曆四年(九五〇) 五月二四日、憲平親王(のち冷泉天皇)

誕生、湯殿読書の侍読となり、『古文孝経』を読む。(『九

曆』)

天曆四年一〇月八日、残菊宴に「霜花滿叢菊」の題で詩

を賦す。(『九曆』)

天徳四年(九六〇) 五月二日、仁王会祝願文を作る。(『日

本紀略』)

著作・作品

『紀在昌集』三巻があったが(『通憲入道藏書目録』)散佚した。

『扶桑集』に詩一首、詩序一首がある。

『本朝文粹』に三首、『和漢朗詠集』に二首が入集する。

他に詩が『類聚句題抄』『本朝秀句』(『河海抄』所引)に、文章が『含英私集抜粹』に残る。

## 21 慶滋保胤 天慶六年(九四三)頃～長保四年(一〇〇二)

原文は「慶保胤」。本姓は賀茂氏で忠行の子。賀茂氏は陰陽道を家業としたが、保胤は儒家となる道を選び、大学寮に入塾し(字、茂能)菅原文時に師事する。学生の身分で内御書所に候し、応和三年(九六三)の善秀才宅詩合、安和二年(九六九)の粟田左府尚齒会に参加する。康保元年(九六四)に創始された勸学会では中心的役割を担った。天禄二年(九七二)頃より具平親王の学問の師として長年に亘って近侍し、親王の許に集う文人たちと交渉を重ねることになる。

天延二年(九七四)頃、賀茂より慶滋に改姓する。文章生外国として近江掾となり(九七七年在官)、その労により方略試の宣旨を得て対策を遂げ、少内記となる。天元・永観年間(九七八～八四)には内記の職務による文章制作が目につくが、永観二年に始まる花山朝の政治刷新が短期間で挫折したのち、以前から心を寄せていた浄土信仰に従って、寛和二年(九八六)出家する。法名、心覚、のち寂心と改める。出家後は比叡山横川に止住したが、また播磨に赴き、書写山に性空を訪ね、八葉寺を創建している。長保四年十月、没する。

小原 仁『慶滋保胤』(人物叢書、吉川弘文館、二〇一六年)があり、「略年譜」に詩文の制作年時についても記述

がある。

## 著作・作品

『保胤集』二帖があつたが(『本朝書籍目録』)散佚した。

『日本往生極楽記』「十六想観面讃」がある。

『本朝文粹』に二二首、『和漢朗詠集』に一九首が入集する。

他に詩が『善秀才宅詩合』『粟田左府尚齒会詩』『類聚句題抄』『新撰朗詠集』『作文大体』『江談抄』『和漢兼作集』『擲

金抄』『平安韻字集』『倭漢朗詠抄註』『無名仏教摘句抄』『書

写山旧記』『続撰和漢朗詠集』に、文章が『和漢朗詠集』『作

文大体』『平安朝佚名詩序集抜粹』に残る。

## 22 橘 正通 生没年未詳

従五位上左京大夫実利の子。大学寮に学び(字、橘能)、また源順に師事する。学生として内御書所に候する。康保二年(九六五)十月、村上天皇が朱雀院に催した擬文章生試(題「飛葉共」船軽)に応ずるが落第。安和二年(九六九)円融天皇の即位に伴い、登省の宣旨を得て文章生試に及第する(『朝野群載抄』所引「高岳相如申文」)。天禄三年(九七二)八月、規子内親王前裁歌合に参加しているが、時に加賀掾。

慶滋保胤と共に具平親王の侍読を勤め、親王邸の詩宴にしばしば参加している。『扶桑集』の編者、紀育名は弟子である。天元五年(九八二)十月以前に宮内丞で没する。

堀内秀晃「橋正通伝記考」(『東京医科大学歯科大学教養部研究紀要』第一号、一九七一年)がある。

#### 文事事績

応和三年(九六三)三月一九日、三善道統が自邸に催した詩合で「酒従花裡酌」の題で詩を賦す。(『善秀才宅詩合』<sup>9</sup>)

天祿二年(九七二)秋、藤原濟時が白河院に催した詩宴に「秋花逐露開」の題で詩を賦す。(『和漢兼作集』572)<sup>9</sup> 存

拙稿「白河院の詩遊」(『平安朝漢文学論考』) 参照。

貞元二年(九七二)前後の七月、具平親王邸の詩宴に「弓勢

月初三」の題で詩を賦す。時に宮内丞。(『本朝文粹』204)

拙稿「平安朝における『文選』の受容—中期を中心に—

(『平安朝漢文学史論考』) 参照。

#### 著作・作品

詩集があったが(『本朝麗藻』巻下、具平親王詩、『江談抄』巻五—27)<sup>10</sup> 散佚した。

『本朝文粹』に三首、『和漢朗詠集』に六首が入集する。他に詩が『善秀才宅詩合』『類聚句題抄』『新撰朗詠集』『擲金抄』『和漢兼作集』に残る。

23 源 相規 生没年未詳

光孝源氏。参議正四位下清平(八七七—九四五)の子。大学寮に学ぶと共に菅家廊下に学ぶ。天徳三年(九五九)の内裏詩合に参加するが、時に民部大丞。応和元年(九六一)肥前守となる。のち山城守を経て、天祿元年(九七〇)撰津守となる。貞元二年(九七二)八月の藤原頼忠家歌合に参加したのが資料所見の最後である。従五位上に至る。

#### 文事事績

天徳三年(九五九)八月一六日、内裏詩合に左方の一員として参加する。(『天徳三年八月十六日闕詩行事略記』)

康保元年(九六四)一〇月、大宰大式小野好古が安楽寺に催

した詩宴で序者となる。(『本朝文粹』336) 存

拙稿「本朝文粹」の一首の詩序と『明衡往来』の一通の

書状」(『国語国文』第八九巻六号、二〇二〇年) 参照。

## 作品

『本朝文粹』に一首、『和漢朗詠集』に四首が入集する。  
他に詩が『類聚句題抄』『香葉字抄』に、文章が『含英私集  
抜粹』に残る。

## 24 菅原雅規 未詳→天元二年(九七九)

高視(後出71)の子で、道真の孫に当たる。15菅原文時は兄弟。生年は、天元二年八月に六十一歳で卒したという『尊卑分脈』の注記からは、延喜十九年(九一九)となるが、高視は延喜十三年卒とされており(『尊卑分脈』)矛盾する。後述。大学寮に学び、文章生を経て官に就く。淡路、因幡、和泉、山城の国守を歴任するが、関白藤原実頼の侍読も勤めている。

## 文事事績

天曆五年(九五二)一〇月五日、残菊宴に「叢香近<sub>二</sub>菊籬<sub>一</sub>」

の題で詩を賦す。(『九曆』『類聚句題抄』423) ㊦

応和元年(九六一)三月五日、村上天皇が冷泉院に催した花宴に「花光水上浮」の題で詩を賦す。(『日本紀略』『扶桑

略記』)

安和二年(九六九)三月一三日、藤原在衡が粟田山荘に催し

た尚齒会に七叟(七人の老人)の一人として参加し、「暮

春藤重相山荘尚齒会詩」を賦す。(『尚齒会詩』) ㊦

拙稿「安和二年粟田殿尚齒会詩」(『平安朝漢文文献の研究』)参照。

なお、七叟の詩は年齢の順に配列される。これに着目すると、この時の雅規の年齢は六十九歳→七十六歳となる。こ

こから生年は寛平六年(八九四)から延喜元年(九〇二)

の間と考えられる。前掲拙稿、注15参照。

天延二年(九七四)あるいは三年秋、永平親王の読書始め(『御注孝経』)に侍し詩を賦す。(『本朝文粹』256、『和漢朗詠集』670) ㊦

拙著『本朝文粹抄』六、第五章「第八皇子の始めて御注孝経を読むを聴く詩の序」参照。

## 作品

『扶桑集』に一首がある。

『本朝文粹』に一首、『和漢朗詠集』に三首が入集する。

他に詩が『尚齒会詩』『類聚句題抄』に、文章が『作文大体』『平安朝佚名詩序集抜粹』に残る。

## 25 藤原篤茂 生没年未詳

北家内麻呂流、備中掾遂業の子。大学寮に学び(字、藤奉)、天暦年間(九四七〜五六)に学生から登省の宣旨を得て文章生試に及第。文章生から官途に就き、少内記、加賀介を経て従五位上図書頭となる。没年齢は未詳であるが、「賦<sub>二</sub>惠雲含<sub>レ</sub>潤」詩(『作文大体』)に「六十余翁百事慵」の句がある。

## 文事事績

天暦年間(九四七〜五六)に『漢書』講書の講師を務める。

(『西宮記』卷一五、藏人所講書)

天徳三年(九五九)八月一六日、内裏詩合に右方の一員として参加する。(『天徳三年八月十六日關詩行事略記』)

応和元年(九六一)三月五日、村上天皇が冷泉院に催した花宴に「花光水上浮」の題で詩を賦す。(『日本紀略』『扶桑略記』)

応和三年(九六三)三月一九日、三善道統が催した詩合に判者の一人となる。(『善秀才宅詩合』)

康保三年(九六六)八月二〇日、守平親王(のち円融天皇)の読書始めに、竟宴の詩序の作者となる。(『日本紀略』)

天禄四年(九七三)一月一五日、大内記、木工頭、淡路守の

いづれかに任じられたいと奏状を奉る。(『本朝文粹』156)

## [ 存 ]

## 作品

『本朝文粹』に四首、『和漢朗詠集』に六首が入集する。

他に詩が『類聚句題抄』『新撰朗詠集』『作文大体』『江談抄』『擲金抄』『続撰和漢朗詠集』に、文章が『新撰朗詠集』『平安朝佚名詩序集拔萃』に残る。

## 26 源順 延喜一一年(九一一)〜永観元年(九八三)

嵯峨源氏、左馬助拳(攀とも)の子。大学寮に学び、また橘在列の弟子となる。天暦五年(九五二)一〇月、撰和歌所寄人へ選ばれるが、時に学生。同七年、四十三歳にして文章生となる。同十年、勘解由判官に転じる。応和二年(九六二)東宮藏人、民部少丞。翌年、大丞となる。康保三年(九六六)従五位下、下総権守となり、翌四年、和泉守となる。天延元年(九七三)従五位上、天元三年(九八〇)能登守となる。

岡田希雄「源順伝及年譜(一)」(『立命館大学論叢』第四輯、一九四二年)、「源順及同為憲年譜(上・下)」(『立命

館大学論叢』第八・一二輯、一九四三年。

神野藤昭夫「源順伝」断章〔『古代研究』第二号、跡見学園女子大学国文学科報』第九・一一・一二・一三・一九二〇輯、平安時代の作家と作品、一九七二年〕一九九二年がある。

文事事績

承平五年（九三五）以前、『和名類聚抄』を編纂し序を作る。〔存〕

岡田希雄「源順伝及年譜（一）」（前掲）参照。

天暦元年（九四七）七月八日、源高明亡室の乳母のために亡

室四十九日諷誦文を作る。〔『朝野群載』巻二〕〔存〕

天暦五年（九五二）一〇月三〇日、藤原伊尹を撰和歌所別当

となす宣旨の奉行文を作る。〔『本朝文粹』385〕〔存〕

天暦五年一〇月、撰和歌所への立ち入りを禁止する禁制文を

作る。〔『本朝文粹』386〕〔存〕

天暦五年一〇月、「賀」緑綿」詩序を作る。〔『本朝文粹』

271〕〔存〕

天暦七年（九五三）一〇月、重明親王が棲霞寺に催した詩宴

に「霜葉満」林紅」の題で詩序を作る。〔『本朝文粹』311〕

〔存〕

拙稿「属文の王卿——醍醐系皇親——」（『平安朝漢文学論考』参照。

天暦八年（九五四）三月二八日、橘在列（尊敬）の詩文集

『沙門敬公集』を編纂し序を書く。〔『本朝文粹』202〕〔存〕

天徳三年（九五九）八月一六日、内裏詩合に作者（四人）の

一人として詩を賦す。〔天徳三年八月十六日闕詩行事略

記〕〔存〕

応和元年（九六一）三月五日、村上天皇が冷泉院に催した花

宴に「花光水上浮」の題で詩を賦す。〔『日本紀略』「扶桑

略記〕

応和元年閏三月、章明親王邸の詩宴に「今年又有」春」の題で

詩・詩序を作る。〔『本朝文粹』221、『新撰朗詠集』54〕〔存〕

前掲拙稿「属文の王卿——醍醐系皇親——」参照。

応和二年（九六二）康保二年（九六五）の冬、神泉苑に遊

び「葉下風枝疎」の題で詩・詩序を作る。〔『本朝文粹』314、

『新撰朗詠集』291〕〔存〕

神野藤昭夫「源順伝」断章——安和の変前後までの文人と

しての順」（『跡見学園女子大学国文学科報』第一三号）参

照。

応和三年(九六三)か四年の三月三日、源高明の西宮邸の詩

宴に参加し「花開已<sub>レ</sub>匝<sub>レ</sub>樹」の題で詩序を作る。(『本朝文

粹』296) [存]

前掲、神野藤論文参照。

康保三年(九六六)夏、右近衛中将源延光の『論語』読書に

侍し、竟宴で詩・詩序を作る。(『扶桑集』巻九、『本朝文

粹』259) [存]

天禄元年(九七〇)～三年の九月三〇日、藤原朝成が仏性院

に催した詩宴に詩・詩序を作る。(『本朝文粹』226、『和漢

朗詠集』275) [存]

拙著『本朝文粹抄』六、第九章「仏性院に秋を惜しむ詩の

序」参照。

天禄二年(九七一)秋、藤原濟時が白河院に催した詩宴に

「秋花逐<sub>レ</sub>露開」の題で詩序を作る。(『本朝文粹』323) [存]

拙稿「白河院の詩遊」(『平安朝漢文学論考』) 参照。

天禄三年(九七二)三月二八日、藤原伊尹、多武峯講堂供養

を行う。その願文を作る。(『多武峯略記』)

天禄三年閏二月、藤原濟時が白河院に催した花宴に参加し

「花影泛<sub>レ</sub>春池」の題で詩・詩序を作る。(『本朝文粹』302、

『擲金抄』) [存]

前掲拙稿「白河院の詩遊」参照。

天延四年(九七六)一月一日、藤原明子の爵を子の佐時に譲

る奏状を作る。(『本朝文粹』171) [存]

拙著『本朝文粹抄』三、第十二章「藤原明子の帯ぶる爵を

停めて男佐時に一階を加へんと請ふ状」参照。

天延四年一月二八日、淡路守を申す奏状を作る。(『本朝文

粹』158) [存]

貞元二年(九七七)前後の七月、具平親王邸の詩宴に参加し

「弓勢月初三」の題で詩序を作る。(『本朝文粹』204) [存]

拙稿「平安朝における『文選』の受容―中期を中心に―

(『平安朝漢文学史論考』) 参照。

天元二年(九七九)三月、盛明親王邸の詩宴に「渡<sub>レ</sub>水落花

来」の題で詩・詩序を作る。(『本朝文粹』307、『擲金抄』)

[存]

前掲拙稿「『属文の王卿』―醍醐系皇親―」参照。

天元三年(九八〇)一月二三日、伊賀・伊勢守を申す奏状を

作る。(『本朝文粹』159) [存]

著作・作品

『和名類聚抄』を編纂する。

詩文集があったが、『江談抄』五—54) 散佚。

『扶桑集』に詩六首、詩序二首がある。

『本朝文粹』に三二首、『和漢朗詠集』に二九首が入集する。

他に詩が『天徳三年八月十六日關詩行事略記』『類聚句題抄』

『新撰朗詠集』『擲金抄』『和漢兼作集』『別本和漢兼作集』

に、文章が『和名類聚抄』『朝野群載』『和漢朗詠集』

『新撰朗詠集』に残る。

## 注

- (1) 前記「扶桑集七十六人」に付した通し番号。七十六人は『扶桑集』の詩人(一)に一覽表として示した。
  - (2) 作品が現存する場合(部分、摘句も含む)は框と表示する。
  - (3) 新日本古典文学大系本の作品番号。
  - (4) 本間洋一著『類聚句題抄全注釈』(和泉書院、二〇一〇年)の作品番号。
  - (5) 和歌文学大系本の作品番号。
  - (6) 『言泉集』所収作については以下同じ。
  - (7) 和歌文学大系本の作品番号。
  - (8) 平安朝における評価の目安として『本朝文粹』『和漢朗詠集』に作品が採録されている場合は、その作品数を示す。
  - (9) 『和漢朗詠集』は伝播原行政筆粘葉本による。
  - (10) 新編国歌大観(第六卷)の作品番号。  
新日本古典文学大系本の条番号。
- (一)とつ・あきお 成城大学元教授)